

はじめに

「原稿の書き方も、取材のやり方も、写真の撮り方も……ぜんぶ、見よう見まね。……独学であることだけは確かだ。」
「この本に具体的な「編集術」を期待されたら、それはハズレである。……編集に「術」なんてない。」
「出版というメディアは終わっているのだろうか。僕はそうは思わない。終わっているのは出版業界だ。」

→ マスコミ志望の就活生 / 現役編集者に向けて、出版業界の現実と編集者の幸せを伝えるための本である

第 1 章

本作りって、なにから始めればいいでしょう？

指があれば本はできる

ブックフェアにて自作本を売るロシア人と出会う → 「本を作る上で重要なのは、……この本を作りたいという思いの強さだけだ。」

読者を見るな、自分を見る

『BRUTUS』の特集「居住空間学」
1980 年代初期 ハイテックというスタイル（モダニズムに対抗）が登場
→建築雑誌に取り上げられない身近なハイテックを紹介する特集を始める

デザイナーという「しもべ」

エディトリアルデザイナーの仕事について
・その本が、なにをどれだけ伝える器であらうとするのかを見極めること
・その本はデザイナーの「作品」ではない

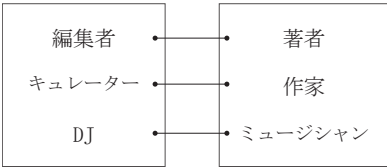


第 2 章

自分だけの編集的視点を養うには？

キュレーターとして、DJとして

編集者の仕事について
・企画立案、取材や執筆依頼、本を組み立てること
・著者が創作以外のことを考えなくていいようにすること ⇨美術館のキュレーター、DJ



カネがないからできること

『TOKYO STYLE』
都築が手がけた最初の写真集
「本当のジャパニーズスタイル本を作りたい」
→東京の若者のライフスタイル：「狭いながらも楽しく暮らす」を特集する

→ 「好奇心とアイデアと、追いかけていくエネルギーがあれば、それ以外のものは後からついてくる。」

第 3 章

なぜ「ロードサイド」なんですか？

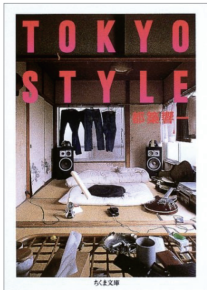
隣のリアルがおもしろい

「ロードサイド」（「そのへんにいくらでもあってだれも見向きもしないもの、でも見向いてみれば興味深いもの」）
を上げることで、「別の可能性」（雑誌に載っている豪華な暮らしとは異なる暮らし）を見せたい。

泳ぐから捕まえてもらえる

『ROADSIDE JAPAN 珍日本紀行』
日本の田舎の変ったスポットを紹介する本
「地方に住みながら東京に憧れ劣等感を抱く人が、地元を見直すきっかけとなしてほしい」
マスコミの特権を行使せずに、普通の人が普通に見られるもののみをまとめた

『STREET DESIGN File』
大多数の人が好きなもの、いちばんたくさんあるものなのに、「俗悪」「無教養」として
触れられずにいるものを集めてまとめたシリーズ
→ 「苛立ちと危機感」が本作りのモチベーションである



第 4 章

だれもやっていないことをするには？

業界は死に、詩は残る / ヒップでホップなもの

『夜露死苦現代詩』
現代詩の外側にあるアウトサイダーな詩をまとめたもの
ex) 痴呆老人のつぶやき、特攻服の特集、死刑囚の俳句など
『夜露死苦現代詩 2.0 ヒップホップの詩人たち』では日本語ラップを特集
→ 「専門家の怠慢」があるから本を書いている



第 5 章

だれのために本を作っているのですか？

東京に背を向けて

- ・ラッパーへのインタビューを通じて、「地方と東京の関係」の変化を感じる（地元愛かつアンチ東京）
- ・専門誌には読者の投稿コーナーがあることが多い
→常連は自身の作品が掲載されているかどうか、毎号楽しみにしている

アートという蜘蛛の糸

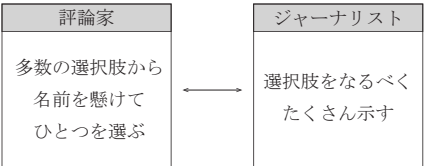
世の中でいちばんアートを必要としているのは「閉じ込められてしまった人たち」なのではないか
ex) 絵画で心情を表現するしかない死刑囚、雑誌に掲載されることが唯一の楽しみであるイラスト職人

第 6 章

編集者にできることって何でしょう？

編集者という生きもの

「僕はジャーナリストだ。アーティストじゃない。」「評論家では絶対じゃない。」
選択肢の提案 ex) こんな詩もありうるのでは？狭いアパートでもハッピーに暮らせるのでは？
→ 「「どっちもアリ」と理解してもらうことで、劣等感から解放されてほしい」



写真の分かれ道

カメラの使い分けについて
・解像度などの技術的問題から決める
・被写体と自分の心理的な関係から決める
→一眼レフ：相手に突きつける 二眼レフ：相手にお辞儀する（優しい表情が撮れる）



検索という麻薬

まとめサイトについて
・他人の苦勞を勝手にコピペしている
・自分で何も動かずにまとめているだけ
・薄給で、面白くないことをやって、「なにがあるのだろう？」

下調べの功罪

インタビューにおいて「肝心なのは事前に調べたことを一度忘れること」
・「この人を知らない読者でも納得できるように」
・ネットの情報を鵜呑みにすると間違いを拡大再生産してしまう
・詳しいと思われない方が、丁寧に教えてくれる

→ 「インタビューにノウハウなんてない」
準備をする≠結果を想定して聞きたいことリストを作る

第 7 章

出版の未来はどうなると思いますか？

ど素人の乱

＝出版業界が開催するブックフェアよりもコミケのようなインディペンデントなイベントが盛り上がっている状況のこと

グーテンベルク以来、本作りは専門家の仕事だった → 20 世紀末のメディア革命 → 現在、ど素人が好きなことを好きなように表現できる
デジタルテクノロジーとインターネット

インターネットの影響
・「スケールメリット」がゼロになった
→業界内の経済的な力関係から生まれる格差を無効化
・将来的にはクラウド化の可能性
→ページ数の制限がない、高画質で届けられる

第 8 章

自分のメディアをウェブで始めた理由は？

やりたいからやるんじゃない

・書かせてもらえる雑誌が少なくなっている
・自分で雑誌（印刷物）を発行する資金がない → ウェブマガジン / メルマガが最適
・コピー（拡散）の自由度
・記事を届けるスピード感 = 「いつでも現場に出ていられるように」

産直メディアとは

ウェブと紙の違いについて
・リアクションの届くスピード感
・ウェブは文章 / 画像量の制限がない → ウェブと紙を「うまく使い分けていくしかない」